

14世紀末における *there* の文法上の機能

藤原 保明

On the grammatical function of *there* in the late 14th century

FUJIWARA, Yasuaki

1385年頃の欠損版『マンデヴィル旅行記』で用いられている465例の *þer* ‘*there*’のうち、関係副詞の11例を除く454例について、意味と文法上の機能の観点から分析した。その結果、現代英語の存在文の *there* に対応する虚辞の機能を担っていると断定できる例は皆無であった。この結果は、ほぼ同時期のコットン版とボドレー版の『旅行記』の *there* の場合と一致するだけでなく、1395年頃のウィクリフ訳の聖書における *there* の用法上の特徴とも一致する。現在のような虚辞の *there* の用法は17世紀初頭の『欽定訳聖書』では確立していることから、虚辞の *there* が出現して一般化し始めたのは1500年頃と推定できる。

はじめに

現代英語の *there* は (1a, b) のように指示作用のない虚辞として、名詞 (句) や代名詞と同様に主文または補文の主語の位置に生じる。このような虚辞は音形 (場所の副詞 *there* [ðeə(r)] に対する [ðə(r)]、場所の指示作用 (deixis) の有無、共起する動詞の種類、文の意味上の主語の種類などから同定できる (Declerck (1991: 32, 266-9), Biber, et al. (1999: 944), Wells (2008: 819))。

- (1) a. *There* is a book on the desk.
b. I don't want *there* to be any mistake.

ところが、古英語や中英語の文副詞を除く副詞は、動詞を修飾する場合、動詞の直前に生じることから、副詞が文頭にくると、無標の語順は必然的に副詞 + 動詞 + 主語となる。それゆえ、たとえば古英語の *þær* ‘*there*’ や中英語の *ther* が文 (または節) の最初の位置に生じる (2) のような場合、これらの副詞は虚辞なのか、それとも場所を指示しているのかを明確にせねばならない。

- (2) a. *Þær* mæg nihta gehwæm nīðwundor sēon
(*Beowulf* 1365)
‘There one may see each night a horrible marvel’
b. *Ther* nas no dore that he nolde heve of harre
(The *Canterbury Tales* 550)
‘There was no door which he would not heave off its hinge’

虚辞の *there* が出現した時期については議論が分かれるが、書記言語の場合は1500年前後とみなせる。その根拠としては、たとえば (1a, b) のような例はいずれも14世紀末の聖書では皆無に近いが、17世紀初頭の聖書ではごく普通に用いられていることから、この200年余りの間に虚辞が一般化するためには、その中間の1500年頃に虚辞として用いられ始めたと考えるのが妥当と思われるからである。本稿ではこの仮説を検証するために、虚辞の *there* がそれほど普及していなかったと思われる1400年頃の文献における *there* 構文の発達状況を把握しておきたい。

1. 聖書における *there* 構文の史的発達

虚辞の *there* の出現から一般化までの過程をたどるために、本稿では最初に現代英語の聖書における虚辞の *there* の用例を特定し、その次に中英語と初期近代英語の聖書の同じ箇所での *there* がどのように用いられているかを探ることにする。

1.1. 現代英語の聖書における *there* 構文

現代英語訳の聖書としては『新共同訳聖書』(The New English Bible: The Old Testament) (1970) が高い評価を得ていることから、本稿ではその「創世記」の第1章の冒頭のいくつかの節で用いられている虚辞の *there* を分析対象とした。すなわち、(3a) の最初の *there* と (3b) の *there* は補文での目的格の例として、(3a) の2番目の *there* は主文での主格の例として挙げた。なお、補文での *there* が名詞句と同等に用いられ、さらに *let* の目的語 (すなわち、補文の主語) となっているとみなす根拠となる例として (3c, d) を示した。

- (3) a. God said, 'Let *there* be light', and *there* was light;
(i.3.)
b. God said, 'Let *there* be a vault between the waters, to
separate water from water.' (i.6.)
c. God said, 'Let *the waters under heaven* be gathered into
one place, so that dry land may appear'; and so it was.
(i.9.)
d. God said, 'Let *there* be lights in the vault of heaven to
separate day from night, and let *them* serve as signs
both for festivals and for seasons and years. (i.14.)

1.2. ウィクリフの『聖書』における *there* 構文

1395年頃の『ウィクリフ派訳聖書』(The Holy Bible) (以下、ウィクリフの『聖書』と略す)¹の「創世記」から(3a~d)に対応する箇所を特定し、虚辞の *there* を抽出しようとした。ところが、(4)に示したように、虚辞の *there* は主文にも補文にも全く用いられていないことが明らかとなった。

- (4) a. And God seide, Ligt be maad, and ligt was maad. (i.3.)
'And God said, 'Light be made, and light was made.'
b. And God seide, The firmament be maad in the myddis of
watis, and departe watis fro watis. (i.6.)
'And God said, 'The firmament be made in the middle of
waters, and depart waters from waters.'
c. Forsothe God seide, The watis, that ben vndur heuene,
be gaderid in to o place, and a drie place appere; and it
was doon so. (i.9.)
'Truly God said, "The waters, that are under heaven, be
gathered into one place, and a dry place appear"; and it
was done so.'
d. Forsothe God seide, Ligtis be maad in the firmament of
heuene, and departe tho the dai and nigt; and be tho in to
signes, and tymes, and daies, and zeeris; (i.14.)
'Truly God said, "Let lights be made in the firmament of
heaven, and let them depart into day and night; and let
them be in as signs, and times, and days, and years;'

そこで、この「創世記」で用いられているすべての *there* (44例)を精査したところ、(5)のような例はすべて「前方照応的」(anaphoric)に用いられている、すなわち、*there* は既出の場所を指していて、また、後続の文中に場所を表す語句が生じていないことが明らかとなった。

- (5) a. And whanne Jacob hadde slept *there* in that nyzt
(xxxii.13.)

- 'And when Jacob had slept there in that night'
b. and offer thou hym *there* in to brent sacrifice (xxii.2.)
'and offer him therein to burn the sacrifice'
c. sche castide awai the child vnder a tre that was *there*
(xxi.15.)
'she casted the child away under the tree that was there'
d. and *there* is founden delium, that is, a tree of spicerie
(ii.12.)
'and delium, that is a tree of spice, is found there'
e. *There* thei spaken to him. (xix.15.)
'There they spoke to him.'

それゆえ、ウィクリフの『聖書』に虚辞の *there* が生じないのは、この聖書固有の特徴なのか、それとも虚辞の *there* が14世紀末頃は未発達であったことによるのかを明らかにせねばならない。

1.3. 『欽定訳聖書』における *there* 構文

次に、1611年に刊行された『欽定訳聖書』(Authorized Version of the King James' Bible)の「創世記」(Genesis)では、(6a)の2例の *there*、(6b)の *there*、および(6d)の *there* はいずれも(3)の例とまったく同様に主文または補文の主語となっている。さらに、*let* の目的語 (= 補文の主語) についても、(6b)の *it* と(6d)の *them* は(3)の場合と同一の語が用いられている。それゆえ、現代英語の虚辞の *there* の用法は17世紀初頭にすでに確立していたと断定できる。

- (6) a. And God said, Let *there* be light: and *there* was light.
(i.3.)
b. And God said, Let *there* be a firmament in the midst of
the waters, and let *it* divide the waters from the waters.
(i.6.)
c. And God said, Let *the waters under the heaven* be
gathered together unto one place, and let *the dry land*
appear: and it was so. (i.9.)
d. And God said, Let *there* be lights in the firmament of the
heaven to divide the day from the night; and let *them* be
for signs, and for seasons, and for days, and years:
(i.14.)

2. 旅行記における虚辞の *there*

2.1. 旅行記と虚辞の *there*

ウィクリフの『聖書』とほぼ同時期の散文の中で分析対象として最適と思われるのは『マンデヴィル旅行記』(以下、『旅行記』と略す)であろう。旅行記であることから、当然のことながら、

さまざまな国や地域、およびこれらに存在する山や川や教会などの場所を示す *there* はもとより、事物の存在を示す表現がきわめて多い。加えて、コットン版、ボドレー版、欠損版をはじめ、数種類の写本が残されていることから、ほぼ同時期の写本間の比較対照も可能となる。ちなみに、Van der Meer (1929: 158-60) はコットン版の「予備の *there*」(preparatory 'there') を分析しているが、*there* の前方照応機能が無視されているため、彼の記述は信頼できない。本稿では欠損版を対象とするが、これは、コットン版とボドレー版の *there* について、すでに藤原 (2010) において、虚辞の *there* とみなせる例は確認できないことを指摘してあることから²、この結果と欠損版の分析結果を対比することが可能となるからである。

2.2. *there* の語形

現代英語の場合、場所の *there* [ðəə] は強勢を受け、母音は完全音価を保持しているのに対して、虚辞の *there* [ðə] は無強勢であり、母音は弱化している (Biber, et al. (1999: 944))。もっとも、この発音上の原則は話者によって異なる場合があることから、*there* の用法を区別する唯一の基準にはなりえない (Wells (2008: 819))。一方、今から600年以上も前の書記言語の場合、音形または語形を手がかりにして、*there* が場所を表す副詞か、それとも主語として機能する虚辞かを区別することは容易ではない。もっとも、古英語の *þær* [θæ:r] が現代英語の *there* [ðəə, ðə] へと変化する過程においてどのような変化が生じ、異形が機能上の区別を担っていたかどうかを明確にしておく必要はある。

『欠損版』の場合、現代英語の *there* に対応する語形は (7) の5種類 (合計465例) が用いられていることから、これらの異形が音声上の特徴や文法上の機能を担っていたかどうかを明らかにせねばならない。

- (7) a. *þer* (218例=46.88%)
 b. *þere* (168例=36.13%)
 c. *þeire* (48例=10.32%)
 d. *þare* (29例=6.24%)
 e. *there* (2例=0.43%)

最初に、(7) の異形に対応する古英語の *þær* [θæ:r] は無語尾であったことから、(7b, c, e) の *þere*, *þeire*, *there* の末尾の *-e* は非語源的 (inorganic) であり、音声面では対応してはいないと思われる。一方、(7d) の *þare* の場合、OED² (s.v. *there*) によれば、古英語では一般的な *þær* と並んで、まれな *þare* も用いられていたことから、音形は [ðɑ:rə] であった可能性があるが、語尾は発音されず [ðɑ:r] であったとも考えられる。次に、語中の *e* は狭めの [e:] か広めの [ɛ:] のいずれかを表す可能性が高いが、

þeire の場合、*i* は先行母音 *e* の開口度が狭いこと (すなわち、[e:]) を表す当時の写字生の便法であったと思われる。それゆえ、*þer(e)* の [θe:r] と *þeire* は書記上競合することになるが、同一母音が複数の形式で表される例は珍しくはない。最後に、(7e) の *there* の *th* はフランス式の表記に基づくが、『欠損版』ではこの語に限らず、古英語以来のルーン文字の þ「ソーン」(thorn) がかなり広く用いられていて、*th* の例はわずか2回にすぎない。もっとも、*þer* に限らず、この写本の写字生は一見無造作に異形を用いているようであるが、たとえば語中に二重字 (digraph) の *ee* を含む *þeere* は *there* を意味する語として用いられることはなく、*their* に限られることは注目に値する。

このように、5つの異形についての十分な音声情報は語源と綴り字からは得られない。これは、音声情報が得にくい散文から例を抽出したことに原因がある。それゆえ、今度は文法上の機能の区別から異形の根拠を探らなくてはならない。なお、特に支障のない限り、以下の記述では異形を *þer* に統一して用いることにする。

2.3. *þer* の文法上の機能

『欠損版』では、場所を表す関係副詞は (8a, b, c) に示したように、一般に *where* が用いられる。しかし、(8d, e, f) のように *þer* または *þer+as* または *þer+þat* 'that' も時折用いられる。これは、*þær* が副詞の *there* と接続詞の *where* を兼ねていた古英語期の名残であり、中英語期以降に *where* が関係詞の機能を担うようになって、かつての *there+as* (または *þat*) は引き続き関係詞の機能を担い、副詞の *there* との区別も示せたからである。それゆえ、(8d, e, f) のような例は、『欠損版』が書かれた頃は *where* の関係詞としての機能が完全に確立していなかったことの証拠となりうる。いずれにせよ、(8d, e, f) のような関係詞の *þer* (11例) は今回の分析では対象から外さねばならない。

- (8) a. for his bones were ybrouȝt fro Bretayne *where* he was
 yburied. (10/30)
 'for his bones were brought from Britain *where* he was
 buried.'
 b. and so to Marca *where* he was chose to be byschope.
 (15/5)
 'and so (they go) to Marca *where* he was chosen to be
 bishop'
 c. And it fallip ofte *where* men fyndep water o tyme
 (23/6)
 'And it often happens that *where* men find water at one
 time'

- d. aboute þe place *þere* heo was grauen of aungels.
(22/17)
'about the place where she was buried by angels.'
- e. And *þer* as oure lord was don on þe cros is writun
(30/12)
'And (the place) where our lord was put on the cross
is written'
- f. kynge Alisaundre dide make a cite *þeire þat* he called
Alisaundre (69/11)
'king Alexander made a city where he called Alexander'

2.4. 複合語の構成素 *per* の機能

『欠損版』では *per* は独立語として生じるとは限らず、後続の副詞と結合して、(9) のような複合語を形成することがある(以下、この種の複合語を「there 複合語」と呼ぶ)。

- (9) a. *þerfore* (82例), *þeirfore* (2例) 'therefore, for that'
(合計84例)
b. *þerynne* (20例), *þeryn* (3例), *þereinne* (2例) 'therein'
(合計25例)
c. *þerof* (10例), *þereof* (1例) 'thereof' (合計11例)
d. *þerto* (8例), *þeireto* (2例) 'thereto' (合計10例)
e. *þervpon* (3例), *þerupon* (1例), *þereupon* (1例),
þerevpon (1例) 'thereupon' (合計6例)
f. *þereaboute* 'thereabout' (4例)
g. *þerby* (3例), *þeireby* (1例) 'thereby' (合計4例)
h. *þerwip* (2例) 'therewith'
i. *þereundyr* (1例) 'thereunder'

古英語の約30種類の *there* 複合語と比べると、『欠損版』の *there* 複合語は3分の1弱の9種類にすぎないが、これらの例には注目すべき特徴がある。すなわち、場所の意味を留めている古英語の接続詞 *þærforan* 'before that' は、『欠損版』では (9a) のように結果や理由を表す副詞 *þerfore* 'therefore' へと変化し、*there* 複合語の中で最も頻度が高く、全体の57.14%を占める。

一方、他の8種類の *there* 複合語は (9b)~(9i) のようにすべて場所の意味を留めていることから、これらの語は虚辞の *there* の史的発達のプロセスを解明する有力な手がかりの一つになりそうである。ちなみに、語源的に無語尾の *per* という形式で用いられているのは218例 (=47.91%) であるのに対して、非語源的な語尾 *-e* を伴う *þere*, *þeire*, *there* は210回 (=46.15%), そして語源的な *-e* を伴う *þare* は27例 (5.93%) 用いられている。しかし、(9) のような複合語では、無語尾形は134例 (=91.16%) 対13例 (=8.84%) と圧倒的に優勢である。このことは、*there* 複合語が無語尾のまま確立し、その後、語尾 *-e* が添加され始

めたが、1400年頃はその初期の段階であったことがわかる。もう1つ特筆すべき点は27例の *þare* はこの種の複合語に全く関与しないことである。この点は *there* の語源を研究する上で貴重な情報であるが、本稿ではこれ以上触れないことにする。

perfore を除く *there* 複合語の機能面の特徴は、*per* が既出の場所を前方照応的に指定し、第2要素の副詞はその場所を詳しく述べる「詳述的」(specific) な役割を果たすことにある。

2.5. *per* 複合語と副詞+*per* の機能

『欠損版』の場合、*per* の後に副詞が生じても (9) のように両者が複合するとは限らず、(10a)~(10e) のように2語が場所の副詞句を形成する例も少なくない。これらの句の特徴は、*per* が前述の場所を受ける「前方照応的」(anaphoric) 機能を果たし、後続の副詞はその場所をより詳しく指定することにあることから、(9) と同様の機能を担っていることである。ちなみに、場所の副詞を強調する場合、強意語は (10f) のように *per* の後の副詞の直前に生じ、また、(10g) のように両者が複合することもある。一方、(10h) のように *per* + 副詞という無標の語順が倒置することがあるが、両者の機能は変わらない。要するに、*per* と副詞の場合、*perfore* を除いて、結合の有無や語順にかかわらず、場所の指示機能は変わらないことになる。

- (10) a. *þer nere* ' (there near >) near there' (18例)
b. *þer bysyde* ' (there beside >) beside there' (3例)
c. *þare vpon* ' (there upon >) upon there' (1例)
d. *þeire fro* ' (there from >) from there' (1例)
e. *þer aboute* ' (there about >) about there' (3例)
f. *þare faste by* ' (there very near >) very near there' (1例)
g. *þare fast(e) by* ' (there very near >) very near there' (2例)
h. *nere þer* 'near there' (2例)

2.6. 前方照応の *per*+前置詞句

(10) のような場所の副詞と同様に、(11) にあげた場所を表す前置詞句 (合計7例) も前方照応の *per* の直後に生じる。この場合も、*per* は既出の場所と照応し、直後の前置詞句はその場所を詳述指定することには変わりがない。この点において、(11) の例は現代英語の *here in Japan* や *there in the corner* のような表現とまったく同等である。いずれの *per* も虚辞ではなく、明確に場所を表しているところに特徴がある。

- (11) a. But it is so hotte *þare in þat yle* (72/18)
'But it is so hot there in that isle'
b. Many oþer yles beþ *þere in þe lond of Prestre Ioon*
(128/6)

‘There are many other isles there in the land of Prester John’

c. And *per* toward *pe* eest is a chapel (40/19)

‘And there is a chapel there in the east’

d. And men seiþ *per* *bizonde þat yle* is anoþer yle (122/9)

‘And it is said that there is another land there beyond that isle’

e. And *per* nere at *þe lyft side* is Sabon and Rama (44/9)

‘And at the left side near there are Gibeon and Ramah’

2.7. 前方照応の *per* と副詞の分裂

それでは、(12) のように、前方照応の *per* と副詞または前置詞句の間に動詞が介在する場合、両者にはどのような関係が存在するであろうか。これら13例の特徴は、古英語以来の無標の語順である場所の副詞 + 動詞という語順を維持し、しかも動詞の主体である主語がその後に生じていることである。ちなみに、介在する動詞は (12a, b) の2例を含む *be* 動詞が11例と (12c, d) の *come* と *brenneþ* の自動詞に限られる。(12) のような *per* が現代英語の *there* と大きく異なるのは、*per* の機能と前置詞句の位置である。すなわち、現代英語では、主語名詞句が「不定」(definite) である場合には、動詞に先行する *there* は虚辞であり、場所を表す語句は意味上の主語の後に明記されねばならない (Declerck (1991: 266-9))。ところが、(12) の例では *per* は前方照応の場所の副詞であり、主語は動詞の後ではなく、場所を表す副詞または前置詞句の後ろにある。

(12) a. but *per* is *ynne* many laumpes liȝt. (29/5)

‘but there is a light of many lamps *within there*.’

b. And *per* was *in þat cuntre* a man (57/7)

‘And *there* was a man there *in that country*’

c. and *per* come to *hym* a kniȝt (95/20)

‘and *there* came a knight *there in front of him*’

d. *per* brenneþ *in his chamber* xli. grete vessels of crestal ful of bawme (117/23)

‘*there* burn 41 great vessels of crystal full of balm *there in his chamber*’

2.8. 副詞または前置詞句と共に起しない *per*

per が場所を表す副詞または前置詞句と共に起しない例はきわめて多く、いくつかの顕著な特徴がある。第一に、*per* は (13) のように文中のさまざまな位置に生じる。すなわち、動詞を修飾する *per* が文頭に生じる場合、その無標の位置は動詞の直前であることから、(13a, b) のように副詞 + 動詞 + 主語という語

順が圧倒的に多い。次に、(13c) のように *per* が文頭に生じて主語と述語動詞が倒置しない有標の例もある。その他の場合として、(13e, f) のように *per* が節または文の末尾に来る例もかなり多い。第二に、(13) のような例の場合、*per* が虚辞だとすると、非文となるか、場所についての情報が不足する文になってしまう。

(13) a. *Pere* dwelliþ many christen men (67/13)

‘There dwell many Christian men’

b. And *pere* liþ seynt Luke *þe euangelist*, (10/29)

‘And St Luke the evangelist lies there’

c. And *pere* he wolde suffer many repreuys (3/7)

‘And he would suffer many reproofs there’

d. Anoþer yle is *per* þat men clepiþ Pytan. (127/30)

‘There is another isle there that men call Pytan’

e. mete and drinke is more honest in oure cuntre þan *pere*, (94/19)

‘food and drink are more respectable in our country than there’

f. for *þe eir* was so drie *pere*. (11/31)

‘for the air was so dry there’

2.9. 場所の副詞 *per* と共起する動詞

現代英語の場合、場所の副詞 *there* と共起する動詞の種類は豊富であり、*be* 動詞以外にもさまざまな自動詞や他動詞も生じる。『旅行記』の場合も (14) のように、動詞の種類は豊富であり、この点からも両者は共通している。ちなみに、節内で場所の副詞が生じる位置は多様であることから、ここでは *per* + 動詞 + 主語という脈絡においてどのような動詞が生じるのかを調べてみた。(14) 以外の例としては、*speke* ‘speak’, *dwele*, *wed*, *come*, *mete* ‘meet’, *ende* ‘end’, *cast*, *zeue* ‘give’, *fynde* ‘find’, *brenne* ‘burn’ などが用いられている。

(14) a. And þei sey þat *per* is non purgatorie (13/9)

‘And they say that there is no purgatory’

b. and *per* passiþ men a brigge of stoon (6/22)

‘and there men pass a bridge of stone’

c. And *pere* liþ seynt Luke *þe euangelist* (10/29)

‘And there lies Saint Luke the Evangelist’

d. and *pere* makip þei a grete feste eche zere (11/18)

‘and there they make a great feast each year’

e. *Pere* growiþ riche wyn and strong (15/6)

‘There grows rich and strong wine’

f. *Pere* bigynneþ *þe vale* of Ebron (24/27)

‘There begins the vale of Hebron’

- g. And *þere* left Crist his disciplis (39/30)
 'And there Christ left his disciples'
 h. but *þer* lete Iulius Apostata take his boones (45/1)
 'but there Julius Apostata let (him) take his bones'

2.10. 外部照応的 *per*

これまで欠損版の『旅行記』に生じる465例の *per* の用法について検討を重ねてきたが、このうちの454例の *per* は場所の副詞であると断定できる。そこで、この節では残りの11例のうち、(15) に示した9例の *per* の機能について考察したい。

- (15) a. And *þei* seiþ þat *þer* is non purgatorie ... vnto þe day of dome. (13/9)
 'And they say that there is no purgatory ... till the doomsday.'
 b. And *ge* schul vndirstonde þat *þer* were þre Herodes (37/11)
 'And it should be understood that there were three Herods'
 c. Yf al it be so þat *þer* be many oþer weyes þat men may go (54/14)
 'Although there be many other ways that men may go'
 d. *git* is *þer* a wey by londe to Iersalem (54/16)
 'Yet there is a way by land to Jerusalem'
 e. *þer* is no god but oon and Macomet his messyngere. (63/19)
 'There is no god but one and Mahomet, his messenger'
 f. And *þer* beþ many oþere cuntrez ..., of whiche it were to myche to speke. (82/20)
 'And there are many other countries ..., of which it would be too much to speak'
 g. and when we come out *þer* were but x. (121/14)
 'and when we came out there were only ten'
 h. *þer* was somtyme an emperor of Ynde (128/11)
 'There was sometime an emperor of India'
 i. *þer* be many oþer cuntreez ... whiche Y haue noȝt yseye, (135/19)
 'There will be many other countries ... which I have not seen.'

(15a) では「(最後の) 審判の日まで煉獄はない」と述べていて、*per* は特定の場所を指してはいない。しかし、当時の人々にとって煉獄はどのあたりにあるのか漠然と頭の中に描けたはずである。それゆえ、このような *per* には言葉で明瞭に述べられていないものを指す「外部照応的」(exophoric) な機能があ

ると考えられることから、この種の *per* は本稿では場所の副詞とみなす。次に、(15b) の場合、悪名高き3人のヘロデ王の名前を聞くと、当時の人々は彼らが統治していた国や時代をだいたい思い浮かべられたはずである。それゆえ、この *per* も外部照応的な場所の副詞とみなせる。一方、(15c) の *per* の場合、「多くの道がある」のは「エルサレムに行くまでの間」のことであるから、この *per* も外部照応的とみなせる。(15d) もこれと同様に、「陸路をエルサレムに行く道」はどこのあたりなのか頭の中で概ね描けることから、(15c) と同じ解釈が成り立つ。(15e) の場合も、神がどこにいるかはだれでも漠然と頭の中に描いていると考えられることから、*per* は外部照応的であるとみなせる。(15f) の場合、これまで取り上げた国々を除く国々がどこにあるか大体想像がつくことから、*per* は外部照応的とみなせる。(15g) の *per* は、谷を通り抜けた時、そこには10名しかいなかったということから、場所を指すと考えられる。(15h) は「かつてインドの皇帝がいた」という文であるから、*per* は当然インドを指すと考えられる。最後に、(15i) の *per* は (15f) の場合とほぼ同様の解釈によって場所の副詞と考えられる。

このように、明確に場所が指定できない例においても、漠然と場所を指定している場合には、*per* は虚辞ではなく場所の副詞とみなせる。

2.11. 虚辞の *there* の出現

最後に、これまでの解釈が適用できそうにない (16a, b) の2例について考察してみたい。いずれも同一の節に *per* は2回用いられているが、この種の例は454例中わずか2例にすぎない。現代英語では、存在文は最も典型的なものとして *there + be + 不定名詞句* (または自動詞) という構造を示すことから、(16c, d) のように *there* が同じ節内で *here* または場所の *there* と共起する場合、存在の *there* の意味や虚辞としての機能は明確である (Biber, et al. (1999: 944))。ところが、このような存在文の構造が確立しているとは思えない時代の『旅行記』の場合、同一節内での *per* の共起の解釈は容易ではない。第一に、他の452例では最初の *per* は明らかに前方照応であることから、(16a, b) の2例の *per* だけを虚辞とみなす積極的な根拠が見当たらない。第二に、強調のために写字生が *per* を繰り返した可能性を否定できない。第三に、写字生が明確な意図がなく2番目の *per* を書いた可能性もある。残念ながら、(16a, b) の2番目の *per* の機能や意味について現時点では明確な判断は下せない。

- (16) a. for *þere* growiþ moneye olyues *þere*. (40/5)
 'for there grow many olives there.'
 b. but *git* *þer* beþ *þer* many of ham. (124/1)
 'but still there are many of them there.'
 c. *There's* more gravy *here*.

d. *There's still no water there, is there?*

まとめ

本稿では1385年頃に書かれた欠損版『旅行記』で用いられている465例の *per* の意味と文法上の機能について分析し、考察した。その結果、前方照応的または外部照応的な機能がないと断定できる *per* は見当たらなかった。この結果は、欠損版のみならず、コットン版やボドレー版の『旅行記』のみならず、これらの写本とほぼ同じ頃に作成されたウィクリフの『聖書』の「創世記」に虚辞の *there* がまったく見当たらないことと一致する。14世紀末頃は虚辞の *there* はきわめて例外的であるという事実は、結果的に、この用法がかなり一般化する16世紀末までに英語に何が生じたのかという新たな課題を提起することになるので、今後この点について考察してみたい。

注

- 1 いわゆる「後期訳」のことであり、英語が粗雑な「初期訳」とは異なり、当時の一般民衆の使う自然な話し言葉を反映した散文で書かれている (Yonekura (1985: 8), 米倉 (1997: 226))。
- 2 2010年5月28日、京都大学において開催された近代英語協会第27回大会でのシンポジウムでの口頭発表「There 構文の史的発達の要因—there はいつ虚辞になったか」。

参考文献

- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad, and Edward Finegan (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*, Pearson Education, Harlow.
- Crystal, David (2008) *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*, Sixth Edition, Blackwell, Oxford.
- Declerck, Renaat (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitakusha, Tokyo.
- Forshall, Josiah, and Frederic Madden (1850) *The Holy Bible, Containing The Old and New Testaments*, Vol. I, Oxford University Press, Oxford, reprinted in 1982 by AMS Press, New York.
- Seymour, M.C. (2002) *The Defective Version of Mandeville's Travels* (EETS, O.S. 319), Oxford University Press, Oxford.
- Simpson, J.A., and E.S.C. Weiner (1989) *The Oxford English Dictionary*, Second Edition, Clarendon Press, Oxford.
- The New English Bible: The Old Testament* (1970), Oxford University Press and Cambridge University Press.
- The Holy Bible: Containing The Old and New Testaments*, Oxford University Press, Oxford.
- Van der Meer, Hindrikus Johannes (1929) *Main Facts Concerning the Syntax of Mandeville's Travels*, Kemink En Zoon, Utrecht.
- Wells, John C. (2008) *Longman Pronunciation Dictionary*, Third Edition, Pearson Education, Harlow.
- Yonekura, Hiroshi (1985) *The Language of the Wycliffite Bible*, Aratake Shuppan, Tokyo.
- 米倉 緯・水島喜喬 (1997) 『中英語の初歩』(英語学入門講座・第5巻), 英潮社, 東京。